

## 認知症のおばあさん

草津中学校 一年

祖母の母は九十三歳で認知症がかなり進んでいる。祖母と一緒に住んで介護をしている。祖母の家へ行くと

「おばあさんの手を握って視線を合わせて笑ってあげて。」

と祖母が言う。私がそうすると不思議だが、ぼんやりしていたおばあさんが私を見て笑い返す。私が困った顔をすると、おばあさんもそんな顔をする。鏡のようだと思う。祖母は認知症は不安症だと言う。だから体に触れてあげると安心して喜ぶと言っていた。

祖母が働いていたので、私の母と母の妹はおばあさんに育ててもらったと聞いている。私は今の状態のおばあさんしかほとん

ど記憶にないけれど昔の写真には元気な姿が写っている。おばあさんは料理が上手で、毎日食事が楽しみだったと言っていた。優しい性格で冬には母達の下着をストーブで温めてくれていたらしい。おばあさんが毎日通っているデイサービスの人も優しく、いやされますと言っておられる。認知症になっても、元々の性格は変わらないのだと思った。

ある時、デイサービスで名前を呼ばれ返事をしたと聞いてびっくりした。おばあさんは自分の名前も忘れていたと思っていた。デイサービスの人は、認知症であるおばあさんを普通の人として扱い、名前で呼ばれるのだと思った。

毎週、日曜日の夜は母の妹家族と一緒に祖母の家で夕食を食べることになっている。認知症のおばあさんも一緒にテーブルで食

事をする。時々横に座っている父のお皿に、おばあさんのお箸がのびてくる。その時は、父は

「これ食べたい？」

と聞いて、そのおかずをおばあさんのお皿に置いてあげる。私はそれを見て、父は優しいなと思った。夕食の後、六歳になるいところがスナック菓子を皆に配って歩いた。おばあさんにも渡した。おばあさんが嬉しそうに食べたので私はびっくりした。私なら、お年寄りには体に悪いから配らないと思う。その後、いところはネジのおもちやで遊んでいた。ネジが止まったので巻いてもらおうと、それをおばあさんに渡した。皆が驚いたのは、おばあさんがネジを巻いて渡したからだ。私なら、おばあさんには無理と思って渡さない。その時、私は気付かされた。心の中で差別をしていることを。

お年寄りだから駄目、認知症だから無理と決めつけている。そしてそれが差別につながっている。いとこは幼いので認知症のことも知らない。だから平等に扱える。私の心の中にある思いやりや知識が差別につながることを気付かされた。以前テレビで障害者の人が言っていた。自分たちを特別視しないでほしい。健常者と同じように扱ってほしいと。

祖母の家から帰る時、父が遅れて玄関に来た。何していたのかと父に聞くと、おばあさんに帰りの挨拶をしていたと言った。皆、祖父や祖母には挨拶をするけれど、おばあさんにはしない。認知症で分からないと思っっているから。父は、おばあさんは人として尊重しているのです、そんな行動がとれるのだと思う。祖母が玄関まで走ってき

て、おばあさん、にこつとして喜んでいたと、うれしそうに父に言った。

私は身近に認知症のおばあさんを見てきて多くのことに気付かされた。差別は私達の心の中にいつもひそんでいる。また知識を身につけることや思いやりの心がかえって差別につながることもある。自分で気付かず差別をしていることがあり、いかに、それに気付くか、そして気付いた後の行動が大切だと思った。人は生きていく限り、その人に障害や病気があっても、人として認めなければならぬし、認められる権利がある。そして、それが人権だと思う。私達一人ひとりがお互いの人権を尊重して差別をしないで暮らしていくことがとても大切だと思った。